「幸せの国」落語歓迎

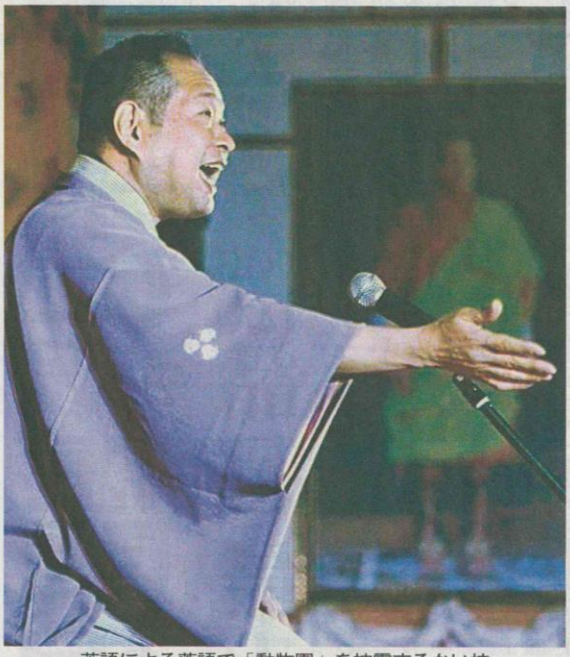
桂かい枝 海外公演20年

間奏曲

桂かい枝が、世界各国で英語による落語公演をスタートさせてから20周年を迎えた。1月上旬、記念イヤーの第1弾として、「幸せの国」として知られるブータンで公演した。

かい枝は1998年に英語落語による初の海外公演を行い、2008年には半年間の全米ツアーに挑戦。これまでに24か国、105都市で公演してきた。

ブータンは、ヒマラヤ山脈の東側に位置し、九州とほぼ同じ広さの国土に約80万人が暮らす。伝統や文化、環境を守り、幸せを求める「国民総幸福（GNH）」という独自の概念を提唱している。



英語による落語で「動物園」を披露するかい枝（今年1月、ティンプーで）＝写真・関健作

ブータンで記念第1弾

ブータンの文化を紹介する特別展が日本で開催されたのをきっかけに、かい枝が首都ティンプーとパロで落語を披露することになった。

演じたのは「動物園」。動物園でトラの皮をかぶっておりに入り、トラのまねをする男をユーモラスに描いた噺で、「ストーリーが分かりやすく、トラのしぐさなどアクションも楽しめる」と選んだ。

当日は、登場人物をいつもよりも少なくして分かりやすく演じ、トラ独特の鳴き声や歩き方を表現。ティンプーでは300人収容のホールは満席になり、客席から何度も笑いが起きたという。

当日の様子はテレビでも中継された。「スポーツは盛んだが、娯楽は圧倒的に少ない国。目の前の舞台で、しゃべりだけで楽しませてくれる芸を珍しがってくれた」とかい枝。

派手な身ぶり手ぶりも交えた高座に観客が沸いた

終演後、現地ガイドも「あんなに笑いが起きた光景は初めてだ」と驚いていた。かい枝は確かな手応えを得た。6月にはニューヨークでの公演を予定している。

「落語は『人の話を聞いて楽しむ』という究極にシンプルな娯楽。噺の登場人物は愛らしくて素朴な庶民たちばかりで、国境を超えて多くの人に親しまれる芸だと実感した。今後も落語を楽しんでもらい、日本に興味を持ってもらえる機会をどんどん増やしたい」

落語の笑いは、「幸せの国」でも歓迎された。言葉の壁を乗り越え、他国の人々との絆を生み、幸せな気持ちになれる唯一無二の芸だとあらためて感じた。（横田加奈）